



□ 10 □

栃木精工社長

川嶋 大樹氏

会社の主役は社員だ。社員が活躍する場を作る。私が私の仕事であり責務。執務室の広さは6畳ほど。社員とコミュニケーションして、意思決定をする重要な場所だ。私はトップではなくキャパテンのような役割。上には立つのではなく、同じ目のフィールドでワンチームの中心にいる存在。会社に派閥はない。注射針などの医療機器、鋼管

中小企業は決断力の有無が生命線だ

製造、磁性材製品のパーマロイ(磁気センサー)の各事業を展開するが、部門間で優劣はなく、平等だ。執務室での仕事は、新聞を読むことから始まり、景況感や業界の動向、企業動向など自社を取り巻く経営環境を把握する。部屋の扉は常に開けている。社員が気軽にいつでも相談できるような雰囲気を作るためだ。執務室ではそのほか、稟議(りんぎ)案件の決裁、経営会議などで使用するプレゼンテーション資料の作成や月次の売り上げを管理している。会議では、社員に会社の売上高を開示している。売り上げは私のお金ではなく、預かったものだ。利益は適正に分配する。皆が主体的に物事を捉え、自発的に発言、行動し相手に感謝の気持ちを持つようになった。その上で私がすべき重要なことは、意思決定のスピードを高めることだ。投資案件は将来的に生産効率の向上や収益につながる可能性が割の確率で見通しが立てば決



## ワンチームの中心にいる存在

裁する。検討時間は長くても1日。早く決裁が出来るように席時間を増やし、部門長に権限委譲を進めている。中小企業は決断力の有無が生命線だ。私は2010年に、父である前社長から事業を引き継ぎ、3代目社長に就任した。「社員を守るために、会社を強くし存続しなければいけない。父から受け継いだ命題だ。一時期、会社の経営環境が厳しい時代に断腸の思いで人員削減を行ったと父から聞いている。会社は「大樹」のような存在でなければいけない。社員の身を守り、果実を実らせ皆で分け合い、新たな種をまいていく。私は社員が主役として活躍できるよう社長を演じているに過ぎない。執務室を訪れる社員にも、同じ目線で語りかける。(栃木県栃木市平柳町2の1の5)

(「コンテンツポラリアートの風」「私の執務室」「ミュージアム探訪」「産業博物館を訪ねる」を週替わりで掲載します)